


審査委員会報告書

(課程博士用)

報 告 番 号	甲 第 1062号	授 与 年 月 日	平成 27 年 3 月 10 日
学 位	博 士 (看護学)		
氏 名	生 年 月 日	昭和 44 年 7 月 31 日生	
	氏 名 (国 籍)	山 田 紋 子	
論 文 題 目	乳房再建術を提案された初発乳がん女性の身体・生活の変化を乗り越えていくプロセスと看護師の役割		
主 論 文 冊 数	1 冊		
審査委員会委員	(氏 名) 主査 北里大学 教授 出口 禎子 北里大学 教授 稲吉 光子 北里大学 教授 戸田 肇 東北大学 教授 佐藤 富美子		
論文内容要旨 審査結果の要旨 試験結果の要旨	別 紙 1 別 紙 2 別 紙 3		
審査委員会の意見	審査の結果、博士(看護学)の学位を授与できると認める。		

- 【注】 1. 報告番号、学位記番号、授与年月日は、研究科委員会の審査後に研究科において記入する。
2. 国籍は、外国人のみ記入する。

[別紙 2]

審査結果の要旨

審査対象者 山田 紋子

審査対象者は修士論文(平成 14 年度修了)において「乳がん患者の手術決定に伴う葛藤を測定する Decisional Conflict Scale 日本語版作成(平成 24 年誌上発表)」を行ってきた。副論文では、「横軸型腹直筋皮弁による一次乳房再建術を受けた初発乳がん患者の手術施行に関する意思決定から結果を認識していくまでのプロセス(平成 27 年 2 月誌上発表)」に取り組み、乳がん患者を対象として手術決定に対する意思決定を主テーマとして研究を実施してきた経緯があり本博士論文へと至った。

本論文では副論文を発展させ、「乳房再建術を提案された初発乳がん女性の身体・生活の変化を乗り越えていくプロセスと看護師の役割」を課題とした修正版グラウンデッドセオリーアプローチを用いた質的研究を行った。乳がん患者を対象とした国内外の既存研究が膨大に存在していることを背景として審査対象者は未だ研究がほとんど成されていない乳房再建術患者を対象とした研究に取り組むこととした。かつて審査対象者は手術決定に対する意思決定を主テーマとしてきた。しかし乳房再建術患者にとっては必ずしも意思決定のみが焦点化されるのではなく、生活や身体の変化といった女性の体験のすべてを探究する必要性を見出した。そして乳がん患者は再建術後必ずしも生活・身体の変化に適応している状態にはならないこと、再建術を自ら選択したことに意味があったこと、この点を踏まえて看護師が関わっていく必要があることが本論文によって明らかとなり、ここに新規性・独創性があると評価された。

以上から本論文はクリティカルケア看護領域の、とりわけ周手術期看護において新たな知見を提供する論文として高い価値を持つことが評価された。なお、理論的サンプリングおよび理論的飽和には限界があったこと、図式化された変化の大きさを示す縦軸については再考の必要性があることが今後の研究課題として残された。

学位審査委員会では、看護学研究の発展に寄与し、クリティカルケア看護学の実践の向上に意義を有することを高く評価し、本論文を博士(看護学)の学位授与に値するものとして認める。

[別紙 3]

試験結果の要旨

審査対象者 山田 紋子

上記の論文提出者に面接し、論文内容および関連事項について試問をおこなった結果、合格と判定した。

よって、博士（看護学）の学位を受けるに十分な能力を有すると認めた。